

泉北ニュータウンにおける独居高齢者の 孤立と人的ネットワーク

— H台住区における事例調査 —

木 脇 奈智子 棚 山 研 新 井 康 友

Abstract

This study is a part of the lifestyle fact-finding for elderly residents living alone in the Senboku-New Town in Osaka. This report seeks to clarify what forms of economic poverty and isolation are actually being experienced, with particular reference to the influence of human networks.

We report interviews with 10 elderly residents living alone, performed in August 2008, together with our analysis and consideration of the results. The results revealed the following: 1) the construction of human networks was greatly influenced by status, previous occupation, gender and other factors, 2) economic resources can become network resources, but these tend to promote network construction in other, more distant, areas rather than among neighboring acquaintances, and 3) there was a tendency for women than for men to have more local acquaintances and to make networks among neighbors more easily.

The future problem is how to promote discussion as to how best to support the elderly living alone.

1. はじめに

いわゆる「孤独死」が社会的に注目されるようになってから、かなりの年月が経過した。マスメディア等の取り上げ方も当初のセンセーショナルなものから、現在では社会的孤立への過程の分析や、その対策へと力点が変わっていると言える¹⁾。

筆者らは 2005 年より、大阪・泉北ニュータウン(以下、ニュータウンを「NT」と略記)で、独居高齢者の生活実態調査に取り組んできた。その過程で「オールドタウン」²⁾化する NT で孤独死が多発している状況に直面した。後述するように、この調査は NT という特殊な住宅都市の地域社会研究でもあったが、入居開始後 40 年を経過した NT では一斉に高齢化が進行していて、老朽化し空室化が進む NT 内の府営住宅に多くの低所得者が流入するという固有の問題もあった。そして、

その府営住宅で孤独死が多発していたのである。

筆者らの調査は 06 年に、泉北 NT 全体を対象にして広くデータ収集や関係者へのインタビューを行った「第一次調査」(詳しくは、羽衣国際大学泉北ニュータウン研究会『泉北ニュータウンと高齢者の居住・福祉 — 先行ケースとしての千里ニュータウンとの比較を通じて』06 年 10 月を参照。以下「第一次報告書」と略記)、NT の典型的な一住区を選定し、08 年 3～4 月に独居高齢者へのアンケート調査を行った「第二次調査」(詳しくは、木脇奈智子・棚山研・新井康友「泉北ニュータウンの現状と居住・福祉 — H台住区における独居高齢者の生活実態調査」羽衣国際大学人間生活学部研究紀要第 4 巻 09 年 2 月。以下「第二次報告書」と略記)、08 年 8 月に H 台の独居高齢者への事例調査を行った「第三次調査」に分けられる。本論文では、主として第三次調査の結果をとりあ

Nachiko KIWAKI 藤女子大学人間生活学部保育学科
Ken TANAYAMA 羽衣国際大学産業社会学部
Yasutomo ARAI 中部学院大学人間福祉学部

げる。

孤独死をめぐることは、その定義等について様々な見解が示されてきたが³⁾、我々は当初から、死のあり方としての孤独死の定義よりも、死後数週間あるいは数ヶ月になっても死が発見されない生前の人的ネットワークのあり方に問題意識があった。その立場から第二次報告書では、単に独居が問題なのではなく、独居高齢者の人的ネットワークの構築には、個々人の経済的な貧富が強く関係していることを明らかにしてきた。

さらに第三次調査では、居住年数が短く経済状態が厳しい状況にあっても、人的ネットワークを広げ元気に暮らす女性高齢者にも出会うことができた。もちろん、ケースの中には一時期全くの孤立状態にあった人も存在する。本論文では、これらのケース分析を通じて、個々人の経済状況がいかに具体的に人的ネットワークの構築に影響を及ぼすのか、その制約を乗り越えるものがあるとするれば、いかなる要素が考えられうるのか、性別や職業経験にも着目して検討したいと考えている。

2. 第一次・第二次調査の経過と結果の要旨 — 泉北ニュータウンの現状にも触れつつ

筆者らが2005年以来行ってきた調査について、本論文および第三次調査に関する範囲で以下に紹介したい。

① 泉北ニュータウンの現状と沿革

泉北 NT は大阪府南部、堺市（一部和泉市）にある人口 139,417、世帯数 58,915、面積 1,557 ha（堺市域のみ 09 年 12 月現在⁴⁾）の大規模住宅都市で、泉ヶ丘、榎・美木多、光明池の 3 地区に 16 の近隣住区が配置されている。規模的には、日本最大の多摩 NT（07 年現在人口約 22 万人、面積 2,984 ha）には及ばないが、同じ大阪府の千里 NT（10 年 12 月現在人口 89,337 人、面積 1,160 ha）を大きく上回り、日本有数の規模を有する NT である。

住宅階層上の特徴では、公的住宅のうち府営住宅が 40.2%（15,797 戸）、公団賃貸住宅が 21.8%、府・堺市の公社賃貸住宅が 15.5% など賃貸住宅が 76.9% を占める。分譲住宅は 22.1% に過ぎない（09 年「堺市統計書」⁵⁾）。

特筆すべきは府営住宅の戸数の多さで、千里

NT の 10,619 戸と比較して 5 千戸も多く、その居住者のうち年取 200 万円以下が 52.8% を占め、とりわけ 05 年以降の入居者では 66.2% を占めている（08 年総務省「住宅・土地統計調査」）。

これに関連して、泉北 NT が大半を占める堺市南区で生活保護受給者が急増しているというデータもある。堺市南保健福祉総合センター生活保護課によると、生活保護率は堺市南区で 24.8%（05 年現在）であり、堺市全体の 23.6% よりやや高いが、その伸び率が大きいことが指摘されている。その原因としては「急速な高齢化」、「管内に公営住宅が多い」、「ニュータウンという地区の性格上、他の地域から転居してくる人が多く、扶養義務関係が希薄」、「ニュータウン内に雇用先が少ない」、「他管内から低額家賃を理由とした移管ケースが多い」といったことがあげられている⁶⁾。

泉北 NT は高度成長期に人口が急増した大阪府において、千里 NT（計画人口 15 万人、62 年入居開始）に続いて、人口規模 19 万人として計画された。67 年に入居を開始し、43 年を経過している。入居開始から 14 年間に 14 万人もの人口が入居したために、他の NT 同様、それが現在「オールタウン」化と呼ばれる状況を作り出しているといえる。

泉北 NT の高齢化率は 10 年現在 24.5% であり、大阪府平均の 18.5% を大きく上回っている。また、その伸び率も急速であり 00 年には 11.2% であったものが 10 年間で倍増し、さらに 10 年後には 37.7% まで増加、その後も引き続き増加すると推計されている⁷⁾。NT 全体の人口は 92 年の 164,587 人をピークに減り続けているが、世帯数は増加傾向にあり、これも独居世帯の増加など高齢化の影響と推測できる。08 年現在の独居世帯数は 13,805 人で、全世帯数の 25.9% を占め、独居世帯の 14.6% は 05 年以降の入居者である（08 年総務省「住宅・土地統計調査」）。

泉北 NT は 3 つの丘陵地帯を切り拓いて造成され、駅までの移動手段はバスしかなく、多くの集合住宅が階段のみの中層住宅であり、高齢者には厳しい生活環境である。その NT への同時期同世代大量入居が一斉の高齢化を招き、経済力ある住民が都心等へ流出し、経済状態が厳しい層が府営住宅に流入してきているのが、泉北 NT の現状である。

② 第一次報告書について

— 孤独死の実態を中心に

筆者らは2006年10月に第一次報告書を作成したが、その内容は「第1章 泉北ニュータウンの開発経過と現状 — 千里ニュータウンとの対比を通じて」(執筆者：棚山)、「第2章 泉北ニュータウンにおける高齢者に関する福祉問題」(執筆者：新井)、「第3章 泉北ニュータウンにおける家族の変化とコミュニティ活動 — ニュータウンの高齢化を支える地域活動の事例から」(執筆者：木脇)となっている。

第1章の内容は上記①に重複するので省略するが、継続調査に向けては、問題が集中していると予想される独居高齢者層を中心に、NT住民の人的ネットワークのあり様を具体的に把握する必要があると考えた。また、住民のコミュニティの力量がいかなるかたちで存在するのかを探ることも、NT再生の展望を考察するうえで重要なテーマであった。

第2章では、上記①で触れた泉北NTの高齢化、生活保護率、住宅階層構成の関係について詳述し、さらに泉北NTで発生している「孤独死」の実態について述べている。また、第二次報告書の3.でも、この問題を引き続き取り上げている。

孤独死に関しては、地元警察署の協力で「独居者の変死」データを入手した。それによると95年には10件であったが05年には47件に増加し、07年には33件となっている。第一次報告書では、03～05年(第二次報告書で06・07年を補足)について分析している。03～07年の合計179件の傾向を指摘すると、まず府営住宅での変死が62.6%を占めることが注目される。また、65歳以上が63.9%であるのに対して、65歳未満が36.1%と決して少なくないことや、女性の34.1%に対して男性が65.9%と多数を占めることも判明した。

継続調査に向けては、孤独死の多数が府営住宅居住者であることにも関わって、住民の経済的困窮が人的ネットワークや地域活動への参加、あるいは孤独死に陥る状況といかに関係するのかが問題であった。また調査の過程で、生活保護受給者はケースワーカーの定期訪問などによって孤立を辛うじて免れていることや、市が斡旋する緊急通報システムはあまり利用されていない実態もわかった。このような公的サポートの機能状況も検討する必要があると言える。

第3章では、高齢化を迎えたNT住民の主体的対応として、「堺市老人連合会を脱退した老人クラブ」、「民間の福祉施設の活動」、「E台『モーニングサロン』における男性リタイア組のパワー」の3ケースを紹介している。とりわけ、E台のケースは女性が主導権を握りがちな地域活動において、男性中心である点がユニークである。これは男性の孤独死が多数を占め、「男性の独居老人は、電話などで『おしゃべり』することが少なく、安否を確認しにくい」と指摘される状況と対照的であり、ライフストーリー的にも興味深い事例であった。

継続調査への課題としては、このようなコミュニティ活動の主体形成をライフストーリーからアプローチする課題とともに、主に男性の「『ひきこもり』型の独居高齢者」の状態をいかに把握するのかという、最も困難な課題も存在していた。

③ 第二次報告書について

— 独居高齢者のアンケート調査

2008年3～4月に行った第二次調査の報告書は「1. 『泉北ニュータウンと高齢者の居住・福祉』報告書での調査の到達点と課題 — H台住区調査を展望して」、「2. H台におけるアンケート調査の分析」、「3. 孤独死予防活動に関する制度・政策的問題提起」の3章から構成されている。この

表1. 住居形態別の孤独死の件数

	2003年			2004年			2005年			2006年			2007年			合計		合計
	男性	女性	小計	男性	女性													
府営住宅	11	5	16	12	5	17	22	10	32	18	10	28	11	8	19	74	38	112
公団住宅	2	2	4	5	2	7	3	1	4	1	1	2	8	2	10	19	8	27
戸建て住宅	4	0	4	3	6	9	5	2	7	3	0	3	2	1	3	17	9	26
その他	1	0	1	4	1	5	1	3	4	2	1	3	0	1	1	8	6	14
計	18	7	25	24	14	38	31	16	47	24	12	36	21	12	33	118	61	179

※「その他」はマンション、府公社住宅、施設である。

1. と 3. については本章の②と重複するので省略するが、2. のアンケート結果について述べてい。

このアンケート調査は泉北 NT の 1 住区である H 台地区の全ての独居高齢者（65 歳以上）を対象に行ったものであり、全 352 名中、回答者は 248 名（1 丁 186 名、2・3・4 丁 62 名）、回収率は 70.4% であった。

なお、H 台地区は 4 つの地区からなっており、「1 丁」は全戸が府営住宅、「2・3・4 丁」は戸建て住宅が多く、持ち家率は 92% を占めている。世帯数の比率としては、1 丁が約 6 割、2・3・4 丁が約 4 割といった比率である。

アンケートの分析軸として重視したのが、「1 丁＝府営住宅」、「2・3・4 丁＝戸建て」の住宅階層であった（以下「府営」、「戸建て」と略記。また、以下の％表示は特記しない限り、府営、戸建て各々の回答数を母数にして算出したものである）。

まず、「独居となった理由」は全体的に「配偶者の死亡」（50%）が多いが、府営では「別居」、「離婚」、「子どもの独立」も 39.7% を占める。独居期間は 5～9 年が 31.6%、10～19 年が 27.0%、20 年以上が 14.5% と長期間の人が多い。

独居高齢者の人的ネットワーク（「行き来している人」）は H 台全体で「親族」（40.7%）と「近所の人」（22.5%）が中心であったが、府営の 45.8% が「誰もいない」と回答している。「近所づきあいが無い」と答えた人も府営では 49.7% に達する。同様に「電話をかけあっているのは誰ですか」という問いにも、「誰もいない」という回答が戸建てでは 6.4% に過ぎないのに対し、府営では 51.1% と半数を超えた。これらの数字は府営に住む高齢者の日常的な孤立を如実にあらわしている。

また、親族等との関係性を見るために「（今年の）正月 3 が日と一緒に過ごした人は誰ですか」と尋ねた結果、府営の 79.3% が「ひとりで過ごした」と答えていて、「困りごとがあったときに手伝ってくれるのは誰ですか」への回答（複数回答）でも、府営の 49.7% が「誰もいない」と答えている。H 台全体では「子どもおよび子どもの配偶者」（28.7%）、「その他の親族」（20.6%）、「友人・知人・近所の人」（21.8%）であった。

独居高齢者が日頃参加している団体や集まりについても、府営では 61.2% が「参加していない」であった。H 地区は自治会加入率が高く、「カフェ

H」「いきいきサロン」「にこにこクラブ」などの住民参加型の活動が多く行われ、少ない経済的な負担で楽しむことができる。こうした活動の場が数多いにもかかわらず、府営の住民はなぜ参加しないのか。その理由として「体の調子が悪い」（29.6%）、「費用がかかる」（23.1%）、「仲間や友人がいない」（25.2%）と答えた人が多かった。体調、費用、人的ネットワークが揃わないと、どのようなメニューを用意しても参加が難しいことが示唆されている。

最後に、「楽しみの有無」について尋ねた。H 台全体で「楽しみがある」と答えた人は 42.0%、「ない」と答えた人が 58.0% であり、とりわけ府営では、65.2% が「楽しみはない」と答えている。

アンケート調査を通じて明確になったのは、戸建てに比しても希薄な府営居住者の人的ネットワークの状態である。そのひとつの原因として経済的困窮があげられるだろう。府営の回答者のうち年収 150 万円未満の人が 93.0% であり、そのほとんどが年金収入である。「生活がかなり苦しい」と「やや苦しい」と感じている人の合計は 74.6% であった。

第三次の事例調査では、アンケート調査で明らかになった経済的な貧富や孤立がいかなるかたちで具体的に経験されているのか、とりわけ人的ネットワークにいかん影響しているのかについて、明らかにすることが目的となる。

3. 第三次調査の結果について

まず、第三次調査の概要を以下に述べる。

調査時期：2008 年 8 月下旬

調査場所：H 台内の各調査対象者宅

調査対象者：第二次調査回答者のうち、インタビューに応じてくれた女性 8 名、男性 2 名に対し、生活史、および現在の生活の状況を人的ネットワークを中心に聞き取りを行った。調査結果は、調査対象者の承諾を得て録音、逐語文字化して分析を行った。なお、調査対象 10 事例のプロフィールは表 2 を参照されたい。

聞き取り調査を 10 事例の中から、本稿ではタイプの異なる 4 ケースを取り上げ、以下に提示する。下線部は本人の語りのまま。（ ）内は筆者による加筆である。インタビュー結果一覧は、表 3 を参照されたい。

表2. 調査対象者のプロフィール

	性別	年齢	転入時期	一人暮らし し歴	一人暮らしに なった理由	転入理由	家 族	職 種	職 歴	年 収	経済状況	住居形態
A	女性	79歳	平成12年	3～4年	子の別居・結 婚	行き場がなかった	娘夫婦が大阪府下（大阪 市）在住	自営業	不明	50～99万円	生活に困らない	府営住宅
B	女性	78歳	平成16年	3～4年	配偶者の死亡	行き場がなかった	娘が大阪府下（松原市） 在住	事務職	20年	100～149万円	かなり苦しい	府営住宅
C	男性	85歳	平成11年	40年	注2)	行き場がなかった	娘が三重県に在住	パチンコ店従業員	30年	無収入（無年 金）	注3)	府営住宅
D	男性	75歳	平成16年	注1)	息子夫婦と別 居	息子夫婦と同居	妹と近居（泉北NT内）。 以前同居していた。息子も 近居	銀行員	不明	200～399万円	注4)	戸建て住宅
E	女性	72歳	昭和61年	18年	母の死亡	姉・妹がいる	姉妹と近居（泉北NT内）	事務職	32年	150～199万円	生活に困らない	公団分譲
F	女性	75歳	無回答	3年半	母が施設入所	息子に誘われて	息子が大阪府下（富田林 市）在住	販売サービス業	不明	100～149万円	生活に困らない	店舗2階
G	女性	75歳	平成11年	10～19年	配偶者の死亡	行き場がなかった	姉妹が九州に在住	販売サービス業	不明	100～149万円	生活に困らない	府営住宅
H	女性	69歳	昭和49年	1年2ヶ月	夫の死亡	住宅債権購入	息子2人が東京都在住	主婦	なし	200～399万円	やや余裕がある	戸建て住宅
I	女性	73歳	昭和48年	3～4年	夫の死亡	夫の知人がある	息子が大阪府下（大阪狭 山市）娘が近居（堺市内）	会社経営	不明	200～399万円	かなり余裕	公団分譲
J	女性	79歳	平成5年	15年	夫の死亡	無回答	息子・娘が近居（堺市内）	販売サービス業	不明	150～199万円	生活に困らない	公団賃貸

注1) 妻は平成11年に死亡。父親は平成13年に死亡。その後、一人暮らしになるが、平成16年に息子夫婦と同居するが、その後しばらくして別居となる。

注2) パチンコ店住みこみ当初から独居。

注3) 生活に困っていないと答えているが、明らかに経済的に困窮している。

注4) 年金生活になると、心細く節約しないと答えるが、年に3回は旅行。週に1回は大阪市に飲みに行っている。

表3. インタビュー結果一覧

対象者	性別	年齢	親族関係	近所付き合い	サークル活動・老人クラブなどへの参加		親族・近隣関係	住居形態
					地 元	地元以外		
A	女性	79歳	○	○	○	×	地元の老人クラブなどに積極的に参加している。転入後、すぐに近所付き合いができた。娘とは毎日、携帯電話のメールをしている。	府営住宅
B	女性	78歳	○	×	×	○	近所付き合いはない。地元のサークル活動には参加せず、離れた場所のサークル活動に参加している。娘と行き来がある。	府営住宅
C	男性	85歳	×	×	×	×	近所付き合いはない。月1回の受診時以外、外出せず。娘とは全く連絡を取っていない。	府営住宅
D	男性	75歳	○	○	○	○	もともと近所付き合いもなく孤立していたが、ボランティア活動がきっかけで近所付き合いが始まった。妹と行き来があるが、息子とはほとんど行き来がない。	戸建て住宅
E	女性	72歳	○	×	×	○	近所付き合いはない。地元のサークル活動には参加せず、離れた場所のサークル活動に参加している。姉妹と行き来がある。	公団分譲
F	女性	75歳	○	○	○	○	友達が欲しいためにボランティア活動を始めた。転入前にいた京都の友達に会うため頻繁に出かける。息子の職場の2階に住んでいるため、毎日息子に会っている。	店舗2階
G	女性	75歳	○	×	○	×	近所付き合いはほとんどない。地元の老人クラブやサークル活動に参加している。姉妹とは毎日、電話している。	府営住宅
H	女性	69歳	○	○	×	○	近所に気心の知れた人はいる。地元のサークル活動には参加せず、離れた場所のサークル活動に参加している。毎日、外出している。毎日、誰かと話している。息子とは疎遠ではないが、普段は連絡を取っていない。	戸建て住宅
I	女性	73歳	○	○	○	×	地元の老人クラブやサークル活動に参加している。息子・娘と行き来がある。	公団分譲
J	女性	79歳	○	×	○	×	近所付き合いはほとんどない。地元の老人クラブやサークル活動に参加している。息子・娘と行き来がある。	公団賃貸

【事例A】Aさん

(79歳・女性・府営住宅に一人暮らし)

Aさんは平成12(2000)年にH台に転入した。転入前は約50年大阪市東住吉区に住んでいたが、家主の相続の事情で立ち退きになり、府営住宅に入居を申し込んだ。H台は自然環境がいいので気に入っている。毎朝緑道を歩き、週2回は徒歩20分ほどのデパートへ買い物や気晴らしに行く。「ノーマイカーデー」で地下鉄が割引になる日を利用して、月に一回くらい大阪市内の娘の家に遊びに行く。娘とは毎日夕方に他愛のないメールをしている。

現在はH台における地域活動に積極的に参加している。老人クラブの活動はものすごい活発でんな。すぐ友達できまねん。ただやし、おもしろいでっせ。老人クラブは月1回ブリザードフラワー、体操、民謡、歌の会などが行われる。時には花見や一泊旅行に行くこともある。市から補助金が出るので月会費200円で参加できる。にこにこサロンには月2回、カフェH台には月1回通うなど、お金をかけずに地域活動を楽しんでいる。そこでできた友達も多く、お互いの家もよく行き来している。友達来て、たこやきしたり、焼きそばしたりします。こういうとこ(集合住宅)は近所づきあいはようせなあかんよな。

「あんた、何かあったら言うてきてや」とか、「ほな、私も言うからあ」とか。向かいのご主人かて、大阪で泊まるさかいに新聞入れといて」とか頼んでいきますねん。

一人暮らしは気楽でいいと感じている。一人やったら気楽やねん。いつ寝ようと、ごはんしよう……。子どもといてたらそんなことできひんもん。今一番気楽やわ。楽しくてね。若いころは洋裁の仕事をしていた。現在も近所の人に頼まれて服を直したり、趣味で小物を作ったりしている。人に喜ばれるのが楽しみである。

介護が必要になったら施設に入りたいと考えている。子どもは「そんな心配せんでええ」て言いますけど(略)今若い人かてそんな余裕あれへんわ。這うてでも一人で暮らしたいなと思うくらいやから。子どもたちに世話にならないで済むように、健康管理には気をつけている。友達との話題は病気、年金、介護が多い。みな、子どもには迷惑かけたくないと言うてはる。

Aさんの収入は年金のみで、1日の食費は1000

円1カ月の生活費は約7万円である。生活に余裕はないが、食べることには困らないと語り、お金をかけずに地域での活動や人的ネットワークを楽しんでいる。

*Aさんは5年前に転入し、知りあいのいない土地で一人暮らしを始めたが、老人クラブをはじめとする地域や自治会の会合やイベントに積極的に参加し、人的ネットワークをひろげ、現在の生活を楽しんでいる。それは話し好きで気さくなAさんのパーソナリティによる部分も多いと思われる。また、同世代の仲間とおしゃべりをしたり、飲食をともにするという機会が多い。この傾向はAさん以外にも女性に多くみられた。

【事例B】Bさん

(78歳・女性・府営住宅に一人暮らし)

Bさんは、52歳の時に夫を亡くして以来一人暮らしをしてきた。以前は大阪市内に住んでいたが、平成16(2004)年にH台に転入。H台の府営住宅は60歳以上は先着順に入居できたためである。

脚の具合が悪いため、買い物は週1回徒歩またはバスで駅まで行っている。それ以外に出歩くことはあまりない。近所づきあいはほとんどない。会ったら挨拶はしますけれども、今、個人的なつきあいはまったくありません。もう何日も(誰にも)会わないですね。

古くからの友人に誘われて老人センターで歌を歌う会にたまに参加している。そこは、ちょうど私に合うような感じだったから。(H台は合わない感じですか?という質問に対して)ここだけの話ですけど。もうほんま、個人的におつきあいしている方は誰もいないですねえ。あまり出ないから、人に会わないから。というように地域の人的ネットワークはほとんどない。車で約30分ところに住んでいる娘が月に何回か訪ねてくる。

ひとり暮らしは気持ちに張りが出ると感じている。一人だと何もかも自分でせないけませんでしよ。人に頼れないから、やっぱり、人にあまり迷惑かけたくないという気持ちもありますし、なるべくからだにも気をつけて。電球の取り換えもカーテンレールの取り付けも自分でしている。案外(戸を)閉めてしまったら、外に気を遣わないで(居心地は)いいかなあって。

夫は生前個人会社を経営しており、Bさんもその事務を手伝っていた。当時の経営者は厚生年金

に入れなかった。夫の死後、Bさんは73歳まで会社勤めをしていたが、現在の収入は夫の遺族年金のみで生活は苦しいと感じている。生活保護受ける人より少ないと思います。収入は、自分が予定していた通りに年金さえもらえてたら……（年金制度による）。生活が苦しいので旅行に誘われても行くことができない。老人クラブなどは知り合いがいないので参加する気にならない。

一人暮らしになって以降、これまで苦労したのはなぜかと疑問を感じ、会社勤めのかたわら四柱推命の勉強を始めた。その結果、自分の運命について現在は納得している。パソコンはMS-DOSの頃から使っており、現在も古い歌を聴くなどして楽しんでいる。

* Bさんは一人暮らし歴と職業歴が長く自立志向である。社会的問題など知的関心も高い。しかし、それゆえか、地域の老人クラブに集う同世代の人たちとは「合わない」と感じており、現在の人的ネットワークは極めて少ない。パソコンやエレクトーン、占いなど個人的な活動を趣味としている。わずかに、会社時代の友人とのつきあいがある。

【事例C】Cさん

(85歳・男性・府営住宅に一人暮らし)

Cさんはいわゆる身寄りのない高齢男性である。約40年前に長崎県の自宅を出て以来、大阪府堺市のパチンコ店に住み込みで働いていた。平成11(1999)年、75歳の時に働けなくなり、「困りごと相談所」で相談したことをきっかけにH台の府営住宅に入るようになった。近所に知り合いはない。40年前に生別した娘が三重県にいるがほとんど行き来はない。

2階に住んでいるが階段を下りるのが怖くて外出はヘルパーの介助で通院するのみである。血圧が上がるので風呂には入っていない。(一人暮らしをして)40年くらいになるが気楽でいい。寂しいとは感じない。困るのは今度みたいに脳梗塞で倒れたときはちょっと困ったです。2ヶ月前に近所の病院の前を歩いていて脳梗塞で倒れ、入院した。右半身に麻痺が残り、膝には人工骨が入っている。退院後はホームヘルパーが週2回来ており、買い物や家事などは頼んでいる。しかし、Cさんは「もう大丈夫なので週1回に減らして欲しい」と交渉していた。食事はご飯を自分で炊き、副食は缶詰と梅干を買って入れており、それですませている。

幼少時は貧困な暮らしを経験したため、大阪に出てきたのは、大阪に行けば白いご飯が食えるって(思ったから)。昔と比べたら(現在は)ほんま楽なもんです。贅沢ですわ。と語る。

パチンコ店に勤めていたときの店長の奥さんだった人が同じ府営住宅に住んでいる。緊急のときはここに電話してくれたらすぐ駆けつけてくる言うてくれてます。電話かけたらとんでくるからって。

一人暮らしの楽しみは、テレビ見るくらいのもの。チャンバラ映画見るのが(好き)。

お酒は好きだが、血圧が高いので、今は(日本酒のビンを)眺めて飲んだ気分になっている。

地域の老人クラブなどに参加しようと思ったことはない。わしはもう九州弁丸出しで、やっぱり、ちょっと付き合いにくいんですわ。(略)人との付き合いが大嫌いなほうなんです。この九州弁がなおせんのですわ。方言のために人づきあいが苦手だという。

三重県在住の娘は、Cさんが入院中に病院から連絡がいったため、退院するときに手伝いに来てくれた。しかし、「なんで私のところに電話するねん」って怒ってしもうた。娘でも嫁に行ったらしまいですわ。親子の仲も嫁にいったらもう…。と語る。ふだんは電話をすることもなく、親族ネットワークはないに等しい。

年金はもらっていない(国民年金に加入していなかった)。現在の生活費は、貯金だけ。1ヶ月5万か6万あれば結構暮らせるんです(そのうち家賃は1万9千円)。生活は苦しいことないです。(もう少しお金を使いたいと)考えたこともない。旅行もどこも行ったことない。住み心地もそんなに悪くない。と語るようにCさん自身は現在の生活に不満を感じていないが、実際の生活のレベルはかなり低く、人的ネットワークも極めて乏しい。

* Cさんは偶然病院の前で脳梗塞で倒れたために、入院治療を受け、現在はホームヘルパーを派遣してもらうことができている。しかし、もし家の中で倒れていたら孤独死していたと考えられる。近所づきあいはなく、自分からつきあいを求める気持もない。「寂しくない」「住み心地は悪くない」と語るCさんの本意を推し量るのは難しいが、社会的ネットワークから孤立したケースである。

【事例D】Dさん

(75歳・男性・戸建分譲住宅に一人暮らし)

Dさんは元銀行員で定年後は65歳まで関連会社の社長をしていた。平成11(1999)年に妻を亡くし、平成13(2001)年に同居の父を亡くした。その後、大阪府北部のI市から平成16(2004)年にH台に転入してきた。転入の理由は、医師である長男が泉北NTにある公立病院に赴任したため、(長男家族と)一緒に住もうやということで向こうの(I市の)家を処分してこちらにきた。しかし、2年半で息子は転勤し転居してしまった。現在は200坪の敷地に部屋数が7つある戸建で一人暮らしである。

不便を感じることはないが、ただ気がついてみたら一週間くらい人と会わずに話をしなかったなということがある。近所の人と立ち話はしないですねー。めんどくさいのです。照れくさい。ないのです。話すことが。行き来することは一切ございせん。

1日に2、3回は外に出るようにしている。目的のひとつはウォーキングで、毎日1万歩歩くことを目標にしている。買い物は家から少し離れた高島屋かピーコックに行く。1週間に1回くらい現役時代から通っている飲み屋(大阪市)に行く。H台で不便を感じるのは交通費が高いこと(大阪まで往復1500円)、話し相手がいなこと。歳とって転居はもうせんぼうがよいですね。知り合いがもういっぺんにいなくなっちゃいますから。以前住んでいたI市には20代から住んでいたの顔見知りばかりだったが、ここでは顔見知りもなく、1日に何人と数えるほどしか(人が家の前を)通らんでしょ。それでこんなことじゃたらんと思いまして、ボランティアを始めたんです。ボランティアだったら気兼ねなく入って話ができるだろうと。1年くらい前から月3回、道路のゴミひろい、小学生の登校の見守り、防犯活動のボランティアをしている。そこで知り合った友達とDさん宅での会費制飲み会「一の会」を始めた。地域のグランドゴルフには週1回参加している。

この地区はね、男一人者であってもいろんな体制(ネットワーク)がありますから、その中に積極的に飛び込んでいけば生活しやすいですよ。はじめは全然知らん人間が皆さん方と何かしようと思っても、どこから入っていいかわからないんです。ですけど一応自治会報でボランティアを

募集しておれば入りやすいんです。

週2回くらい、近所に住む妹がおかずをもってきてくれて助かっている。職場時代の友人とはつきあいが無い。老人大学で陶芸をした仲間(男性3人女性7名)で月1回会うのが十数年続いている。年に3回くらい1週間~2週間半くらいの国内旅行に行く。友達や自治会の人達と同行することもあるが、ひとりで行くこともある。元気なうちにあちこち見て回りたい。一人暮らしは気楽でよい。自炊にも苦労はしていない。介護が必要になったら有料老人ホームに入りたい。厚生年金と企業年金で月27万円あり、生活には困らない。
*転入後息子家族が出て行った頃は孤立していた。ボランティアは「求められている」という気持ちから応募することでできた。それを契機に、老人会やグランドゴルフ、「一の会」などのネットワークを持つことができた。しかし、現在も電話やメールは用件がなければしないし、立ち話は照れくさくてできない。Dさんのようなコミュニケーションのタイプは男性に多いのではないだろうか。

【事例E】Eさん

(72歳・女性・公団分譲に一人暮らし)

Eさんは、大阪府北部のIK市から昭和61(1986)年に、母親と二人でH台に転入してきた。転入前は両親と三人で暮らしていたが、父親が亡くなったため、Eさんの姉と妹が暮らしている泉北NTの分譲住宅を購入して入居した。若いころ一度結婚したが、12年目に離婚。その後資格を取って就職し、3人姉妹だったので両親のもとへ帰って同居した。63歳まで32年間事務職(経理事務)をして働いた。平成2(1990)年に母親が亡くなって以来18年間、一人暮らしをしている。公団分譲の集合住宅は落ち着いた外観で、近隣住民の転出入も少ないという。

(生活は)今は元気ですから、あまり困ったことはないですね。元気な時は一人暮らしは気楽でよいです。走って3分のところに妹が住んでいるので寂しいと思うことはない。ほとんど毎日会っている。気持ちの上でもなにかあったらすぐ(連絡する)。

日常は、習いごと(音楽、体操、俳画など)の帰りに高島屋で買い物をする。その際は妹の車に乗せてもらっている。妹とのネットワークは密である。Eさんには実子はいないが、妹の次男(40

歳・独身)がEさんの養子になっている。E家いうの(私で)絶えますから。今思えばこれは旧い考えなんですけどね。このごろはもう、そんなん思ってないです。継いでもらうのはお墓だけですね。先々なにかあった時は(車で10分くらいのところに住んでいる養子が)ちょっとくらいみてくれるかなと……。今のところなにもしてもらうことはないですけど。

近所づきあいは結構ある。友達も多いが、現在自治会の役員をしている。14年前は理事長もした。経済的には厚生年金だから、むちゃくちゃ贅沢はできない。まあ旅行したりするのは別の貯めていたお金からとかいう感じで。会社時代の友達と年に1回くらい海外に行く。ほか、ちょっとした旅行はわりかたよく行っている。一泊とか国内旅行は。

地元の老人の会には入っていない。入ってくださいという誘いはあるが、入るつもりはない。「カラー」ですね。やっぱり。と語るように、近所の老人会は自分のカラーと合わないと感じている。長く仕事をしていたので、地元の主婦たちとはちょっと違うからね。そのグループとは、グループっていうのかちょっと合わないところがあるですね。

生協の宅配を利用して自炊をしているが、時々妹と外食をするのが楽しみである。

*お稽古ごとや旅行をし、比較的余裕のある生活にみうけられた。姉や妹との親族ネットワークが強く、地域の自治会の役員はしているが地元の社会活動には参加していない。職業歴が長いために、「会社時代の友人の方が話が合う」と語るが、地元の府営住宅に住む人々と、分譲住宅の人々とは経済的資源が異なるため、交流が生まれにくいとも考えられる。

4. 考察

(1) 分析の視点

「はじめに」で述べたように、筆者らは今日的課題である孤独死問題に関して、孤独死そのものに焦点を当てるのではなく、生前の人的ネットワークのあり方に焦点が当ててきた。それに関連する研究として社会的孤立がある。

高齢者の社会的孤立の問題を先駆的に取り組んできた河合克義は、大都市に暮らす一人暮らし高齢者が社会的孤立している生活実態を明らかにした⁸⁾。一方、他の研究者からは社会的孤立している高齢者は少なく、高齢者は何らかの形で家族や友人・知人などとの関係を保っているという指摘もある⁹⁻¹¹⁾。

そもそも社会的孤立の定義は一樣ではなく、その都度、操作的定義が用いられており、定義の設定内容により社会的孤立の出現状況も違っている。そのため、「社会的孤立」か「非社会的孤立」かの判断は容易ではない。しかし、第二次報告書で明らかにしたように、人的ネットワークの構築には、個々人のパーソナリティだけの問題ではなく、経済的な貧富が強く関係している。

まず、本調査の一人暮らし高齢者の孤立の実態を明らかにするため、人的ネットワークである近所付き合いの状況について、「近所付き合いがある」(以下、「タイプI」とする)、「近所付き合いはないが、他の地域での付き合いはある」(以下、「タイプII」とする)、「近所付き合いも他の地域での付き合いもない」(以下、「タイプIII」とする)の3つのタイプに分類した。そして、この3つのタイプの共通点と相違点を見出すための分析軸として「性別」「居住年数」「経済状況」「職歴」の視点から類系化を試みた(表4)。

「近所付き合い」の範囲については議論の余地を残しているが、本分析においては、サークル活動

表4. 人的ネットワークの傾向

		性別	居住年数	経済状況	職歴
タイプI	近所付き合いがある	女性	長い	良い	短い
タイプII	近所付き合いはないが 他の地域での付き合いはある	女性	短い	良い	長い
タイプIII	近所付き合いがなく 他の地域でも付き合いがない	男性	長い	悪い	長い

や老人クラブなどに参加していることも「近所付き合いがある」とした。

また「近所付き合い」の方法についても、どのような方法なら近所付き合いを保っていると判断すべきか議論の余地を残している。今日、電話やEメール等が普及し、お互いに対面接触することなく、近況を報告し合うことができるようになった。これまでのようにお互いに対面接触することで近所付き合いを保ってきた時代と大きく様変わりしている。しかし、遠方に住んでいる親族や友人・知人などと電話やEメールで毎日のように連絡を取り合い、お互いの状況の変化を不審に思っても、すぐに訪問することは難しいと推測される。そこで、本分析においては「一定の頻度で対面接触している」ことを人的ネットワークを保持していることの指標とした。

(2) タイプ別にみた人的ネットワークの傾向

① 「近所付き合いがある」(タイプⅠ)

「タイプⅠ」は、女性が多く、H台における居住年数は長い傾向にある。そして、職歴は短い傾向にあり、経済状況は良い者が多い傾向にある。

【事例A】【事例E】は、共に近所付き合いが活発で、居住年数が長いことが共通している。しかし、両者は地域のサークル活動や老人クラブへの参加については対照的である。【事例E】は、経済状況が良く、近居の姉妹との親族ネットワークが強く、外食をしたり、旅行に出かけたりしている。また、近所付き合いも多く、現在も自治会の役員をしている。しかし、地域の人々は「自分の『カラー』には合わない」と言い、地域のサークル活動や老人クラブなどへの参加は敬遠し、少し離れた場所で開催されているサークル活動に参加している。

統計局「家計調査」(2006)によると、高齢者世帯の消費支出の内訳では、「交際費」「教養娯楽費」の割合は「食料」の次に多くを占めている。そのため、経済状況が悪い者は、「交際費」「教養娯楽費」を節約する傾向があり、交際全般を控える傾向にある。【事例B】はその典型である。一方、同様に経済状態が悪い状況にあっても【事例A】は、地元の老人クラブが企画する日帰りバス旅行などに積極的に参加し、お金をかけずに人的ネットワークをひろげている。

これらのことから近所付き合いにおける経済的

要因がうきぼりとなった。【事例A】は府営住宅に住み、【事例E】は分譲住宅に住んでおり、社会階層や収入における格差がある。このように社会階層格差がある者同士が同じ地域でのサークル活動や老人クラブなどで共存することは難しいという仮説が成り立つのではないだろうか。

また、職歴が長い【事例E】と【事例D】を比較すると、【事例E】は会社時代の友人との付き合いが保たれている。一方【事例D】は経済状態も良好であるが、会社時代の友人との付き合いはない。定年退職後の会社時代の付き合いが保たれているかどうかは、後述するように経済状況や職歴に因らない、ジェンダー要因が影響しているとも考えられる。

【事例D】はボランティア活動への参加をきっかけに、地域から孤立している状況を打破できた事例である。これらの「タイプⅠ」の一人暮らし高齢者に共通するのは、自ら積極的に地域のサークル活動やボランティア活動などに出向いていることである。この傾向は齊藤雅茂が指摘する「非孤立群」の特徴の1つである「他者と交流する機会に対して積極的である」¹²⁾と一致する。また、「タイプⅠ」は、居住年数が長く、【事例A】以外は、戸建て住宅や分譲住宅に住んでいる。園田眞理子は借家居住が多いと、地域への帰属意識が低く、地域とのつながりが希薄になると指摘している¹³⁾ように、戸建て住宅や分譲住宅で暮らしている者は、地域への帰属意識がより高く、近所付き合いも保ちやすい傾向が読みとれる。

(2) 「近所付き合いはないが、他の地域での付き合いはある」(タイプⅡ)

「タイプⅡ」は女性に多く、居住年数は短い傾向にあり、泉北NTへ転入して間がない者が多い。職歴は長い傾向にあり、経済状況も良い。近所付き合いはないが、少し離れた地域での人との付き合いが保たれているのが特徴である。

齊藤は、経済状況が良好でも転居をきっかけに地域から孤立するケースがあると指摘している¹⁴⁾。経済状況が良好な【事例D】も息子夫婦と同居することを理由に泉北NTに転入後、すぐに息子が転勤・転居したため地域で孤立した。しかし、【事例D】は、近所付き合いはないが、地元以外での付き合いをしていた。つまり、経済状況が良ければ、遠方に出かけてかつてのネットワークにアク

セスしたり、共通する趣味活動などの地域以外のネットワークを構築することが選択できるのである。この場合、経済力が人とつながる資源になり、近所付き合いで人的ネットワークを作る必要性・緊急性を感じていないのが特徴である。

また、【事例B】【事例D】は職歴が長い。男女を問わず職歴が長いケースが地域から孤立しやすくなるのはなぜだろうか。仕事中心の価値観に捉われ、職業的場面以外でのコミュニケーションは苦手であるとも推測できる。ただし、【事例D】は、昔からつながりがある行きつけの飲み屋のような人的ネットワークを保っている。すなわち近隣での人的ネットワークの構築には、職業的コミュニケーションからの脱却が可能かどうかの影響を及ぼすという仮説が成り立つ。これは定年退職後の男性の地域における孤立傾向とも関連するだろう。

(3) 「近所付き合いも他の地域での付き合いもない」(タイプⅢ)

「タイプⅢ」は男性のみで、居住年数は長い。職歴は長いが、経済状況は悪い。

経済的に困窮している者ほど地域で孤立しやすいことは、国内外の先行研究で指摘されている¹⁵⁻¹⁷⁾。また、近藤克則は社会疫学の視点から病気がちの者や社会階層が低い者ほど外出の機会が減り、社会的に孤立しやすい傾向にあると指摘している¹⁸⁾。さらに平井寛らの調査では、男性の高齢者で、所得の低い者の死亡率は、所得の高い者の3倍あり、所得により死亡率に差があった¹⁹⁾。そして、第一報告書で明らかにしたように、泉北NTでは65歳以上の男性の孤独死が多く、府営住宅での発生率が高い。つまり、孤独死は当人の生前の経済状況と深く関わっており、低所得者層にある高齢者に出現しやすい。

本調査における【事例C】は無年金状態で経済状況が悪く、地域から孤立した状況にあった。このケースは社会的孤立した結果孤独死し、誰にも気付かれずに発見が遅れる可能性が高い典型的な事例である。

くわえて【事例C】は入院治療をきっかけにホームヘルパーの利用に結びついたが、現在はそれも断ろうとしている。また、近所付き合いもなく、人的ネットワークは極めて乏しい。さらに客観的にみても明らかに経済的に困窮しているにも関わ

らず、本人は生活が苦しいと語っていない点に着目したい。すなわち社会的支援を求めない、援助拒否の状態である。そして、【事例C】の生活状況は、単なる「孤立」だけに留まらず、食生活の貧困も顕著であり、このまま【事例C】を放置することは人権問題でもあるといえよう。小川栄二らは、このような事例は地域社会の中に「潜在化」し、生活状態がかなり悪化するまで誰にも気付かれず、気付いた時には援助拒否をし、支援には困難をきたす事例が在宅ケアの現場で見られることを指摘している²⁰⁾。

4. 階層・職業・ジェンダーと人的ネットワーク

(1) 人的ネットワーク構築における階層・職業要因

本調査において、高齢者の階層は人的ネットワーク構築の方法に大きな影響を与えていた。たとえば【事例E】のように経済状況が良いケースは、経済状況が悪い者との近所付き合いを敬遠しながらも、他の地域で人的ネットワークを構築していた。一方、経済状況が悪いケースでも人的ネットワーク構築は可能であった。たとえば【事例A】は、話し好きで気さくなパーソナリティであり、地域のサークル活動や老人クラブに積極的に参加し、人的ネットワークをひろげ、現在の生活を楽しんでいる。同世代の仲間とおしゃべりをしたり、飲食をしたりする機会も多く、このような傾向は女性に多くみられた。

しかし、経済状況が悪い【事例B】は、近隣での人的ネットワーク構築ができていなかった。【事例B】と【事例A】の相違点は、パーソナリティの違いに加えて、【事例B】の職歴が長いことによって話題やコミュニケーションのとり方が異なるという理由も考えられる。【事例B】同様に職歴が長かった【事例D】は現在、近所付き合いもあり、その他の地域での付き合いもある。しかし転入当初は、近所付き合いがなかった。

また、男性で職歴が長期間という共通点を持つ【事例C】と【事例D】を比較すると、人的ネットワーク構築状況に大きな差がある。これは経済階層が影響していると考えられる。職業歴をみると、【事例D】はホワイトカラー(元銀行員)である。経済的な余裕を資源として、ボランティア活動で

知り合った友人と自宅で飲み会（食事会）を行っている。一方、【事例C】はブルーカラー（元パチンコ店従業員）である。生活は困窮しており、人的ネットワークもほとんどない。また、人と付き合うことも拒んでいる。今後、【事例C】のような高齢者が人的ネットワークをどのように構築していくかが課題となる。

【事例C】のような支援を求めない者への関わりは容易ではない。しかし、人は生まれた時から援助拒否が可能なわけではない。これまで誰かの助けを借りて生きてきたはずである。【事例C】もこれまでの生活史の中でなにかをきっかけに援助拒否の立場を取るようになったことが推測できる。今後は援助を受け入れるような働きかけを続けることが重要である。

しかし、介護保険制度による契約関係を前提に、民間事業者が中心となって介護保険サービスを提供している現状では、利益につながらない援助拒否事例は敬遠されがちである。また、要介護状態でない者は介護保険サービスを利用できず、支援を受けられない。

ここでは、河合も述べているように²¹⁾、介護保険制度施行以前に存在した「公務員ヘルパー」が、要介護状態の有無を問わず、援助拒否事例に粘り強く働きかけ、関わり続けることが必要ではないだろうか。それが高齢者の孤立や孤独死の予防につながるだろう。

(2) 人的ネットワーク構築におけるジェンダー要因

次に、人的ネットワーク構築における男女間の違いについて考察する。

鈴木淳子は、「男性のメンタルヘルス」において次のように述べている。例えば、「男は強くあるべきだ」あるいは「男らしい男は感情を抑制する」という男性性のステレオタイプに忠実に従えば、男性が家族や恋人や友人や同僚などの身近な人々との関係において、心を開き悩みや苦しみを打ち明けて親密さを獲得することは難しい（鈴木 2006）。

このような視点から事例を分析すると、【事例C】が人的ネットワークを拒否し、病気がちかつ困窮した生活を送りながらも「困ったことはない」「人づきあいは嫌い」と語っているのは男性的な特徴であるかもしれない。それは言い換えると「困っ

たことがあっても人には言いたくない。弱っている状況を知られたくないので人とはつきあわない」とみることができただろう。また、【事例D】が「（近所の人と）挨拶はするが、立ち話は照れくさい」「用件がないと（親族にも）電話をしない」と語っているように、男性は意味のない立ち話やいわゆる「茶飲み話」をしない傾向にある。【事例D】はH台に転入した当時、知り合いが全くいなかったときに、自治会報のボランティア募集の記事を見て応募した。ボランティアとして「公的に求められている」からこそアクセスできたのであり、自ら声をかけるなどして人的ネットワークを作っていくことは難しかったと本人も語っている。

本研究で男性を2事例しか取り上げていない。その理由も、「インタビューを受けてもよい」と応じてくれた高齢者が女性20ケースに対して男性は皆無だったためである（【事例C】【事例D】は人づてに「お願い」して紹介していただいた）。男性はむやみに自己開示をせず、とりわけ自分の弱みや困窮状況を他人に見せることを是としない。この男性性が人的ネットワークを広げにくい状況に陥らせている一因であることは、男性のホームレスや孤独死、アルコール依存や自殺率の高さに結びついていると鈴木は述べている。

また、伊藤公雄は男性学およびジェンダーの視点から、これらの「男性問題」を解決するには、男性たちは「男らしさの鎧」を脱いで、強がらない生き方をするべきだと指摘している（伊藤 1996）。

一方、女性のネットワーク構築力が高いことは早くから注目されてきた。上野千鶴子は、血縁、地縁、社縁（PTAなど子ども縁を含む）を除く選択性の高い少人数の対面集団を「選択縁」と名づけた（1988）。そのなかにはココロザシ型とオタノシミ型があると分類しているが、男性と異なるのは女性たちが「集まることを楽しむ」点だろう。選択縁で活動する女性たちは、口こみや友達の誘いで集まり、公的施設や自宅などお金のかからない場所で活動するものが多い（上野 2008）。多くは集まって話をするのが目的であり、それ以外の目的は必要としない。自己開示は恥ずかしいことではなく、むしろお互いの話を聞くこと、聞いてもらうことそのものを目的とするのである。とりたてて用件のない電話やメール交換も多い。これを女性性と呼ぶとすれば、一人暮らしの人的

ネットワーク構築も女性のほうが容易であると想像できる。「私はこんな性格だから、家にはよく友達が来る」と語る【事例A】は典型的なケースである。しかし、【事例B】のように、女性の中にも職業歴が長い場合に、近隣とのネットワークをつくりにくいケースもみられた。肩書きや効率を重んじる、いわゆる「男社会」型のコミュニケーションをとってきた場合、性別を問わずネットワーク構築のあり方が異なることが示唆された。

5. おわりに

「オールド化」するニュータウンに生活する一人暮らしの高齢者が、いかに親族以外の人的ネットワークを構築しているのか(あるいはいないのか)に関するデータを分析検討した。それらをもとに、一人暮らしの高齢者の人的ネットワーク構築における階層・職業およびジェンダー要因に関するいくつかの仮説生成を試みた。

今回の第三次調査でインタビューできたのは10事例にすぎず、本調査の結果は一般化できないという点において限界がある。しかし、タンスタル (Tunstall, J) が『老いと孤独；老年者の社会学的研究』(1966)の中で指摘しているように、高齢者の孤立事例は少数の事例であっても、重要な問題を含んでいる²²⁾。本調査では、第二次調査(H台における全戸質問紙調査)の量的分析(2008)を質的、具体的に検討し、新たな問題を提起したことに意義があると考えられる。

今後の研究課題としては、何をもって「社会的孤立」とみなすのかという指標を精緻化すると同時に、高齢者がいかに人的ネットワークを形成、あるいは喪失したのかを把握すること、さらには人的ネットワークの状態によっていかなるサポートが可能であるかを明らかにすることが残されている。単身世帯が全世帯の21.0%(2009)²³⁾と増え続ける現在、変わりゆく社会の動向と社会的弱者に対するサポートのあり方を考える必要度は増す一方である。今後の政策形成の基礎となる実証研究を続けていきたい。

付記：

本論文は、平成19年度に財団法人日本証券奨学財団研究調査助成を受けて行った研究成果の一部である。

参考文献

- 伊藤公雄『男性学入門』作品社、1996
- 上野千鶴子・電通ネットワーク研究会『「女縁」が世の中を変える——脱専業主婦のネットワークキング——』日本経済新聞社、1988
- 上野千鶴子『「女縁」を生きた女たち』岩波書店、2008年
- 鈴木淳子「男性性とメンタルヘルス——男らしさの代償?——」柏木恵子・高橋恵子『日本の男性の心理学——もう一つのジェンダー問題』有斐閣、2008年、pp.24-28
- 木脇奈智子・棚山研・新井康友「泉北ニュータウンの現状と居住・福祉——H台住区における独居高齢者の生活実態調査」羽衣国際大学人間生活学部研究紀要第4巻09年、pp.1-14
- 斉藤雅茂、冷水豊、山口麻衣、武居幸子「大都市高齢者の社会的孤立の発現率と基本的特徴」日本社会福祉学会『社会福祉学』第50巻第1号、2009年、pp.110-121
- 野沢慎司『ネットワーク論に何ができるか——「家族・コミュニティ問題」を解く』勁草書房、2010年
- 羽衣国際大学泉北ニュータウン研究会『泉北ニュータウンと高齢者の居住・福祉——先行ケースとしての千里ニュータウンとの比較を通じて』(財)太陽生命ひまわり財団平成17年度研究・調査助成 研究成果報告書、2006年10月
- 冷水豊「高齢者の社会的孤立と社会福祉の役割を問う」『社会福祉研究』第106号、2009年、pp.51-59
- NHK「無縁社会プロジェクト」取材班『無縁社会』文藝春秋、2010年
- 藤森克彦『単身急増社会の衝撃』日本経済新聞社、2010年
- 田中俊之「地域に男性の居場所を作る」『男性学の展開』青弓社、2009年、pp.97-117

註

- 1) 孤独死が本格的にメディアに取り上げられたのは、阪神・淡路大震災における被災者の問題以降では、2005年9月24日放映の「NHKスペシャル ひとり団地の一室で」を嚆矢とする。当時は死後数ヶ月を経過してから孤独死が発見されたことなどが話題を呼んでいた。最近では、10年1月31日放映の「NHKスペシャル 無縁社会」や、「朝日新聞」の連載「孤族の国」(10年12月26日～)などが孤独死に至る人々の「縁」の希薄さや、セーフティネットとなりえない社会システムの問題性を取り上げている。
- 2) 「オールドタウン」化とは、概念として定義づけられたものではないが、NT居住人口の少子高齢化と建物の老朽化、またNTの居住形態が高齢住民の生活実態に合わなくなってきているこ

- とを指して、マスメディア等がこのように呼んだものとする。
- 3) 「孤独死」の定義については、額田勲による「独居死」、厚生労働省による「孤立死」など、別名称をつけることをはじめとして多岐にわたっている。詳しくは新井康友「一人暮らし高齢者の孤独死の実態に関する一考察——A県Bニュータウンを中心に」研究紀要第11号84～89頁、中部学院大学・中部学院大学短期大学部を参照。
なお、本論文における孤独死は警察署を通じたデータ収集の都合上、「独居の変死」というかたちをとっている。
 - 4) 統計データについては、NTの人口減少や高齢化の傾向が調査当時と変わらず、むしろ激化しているため、可能な限り最新のデータに更新した。
 - 5) 泉北NTの住宅階層構成については、「堺市統計書」の公的住宅のみのデータとは別に、堺市『泉北ニュータウン再生指針』2010年5月による民間マンション等を含んだデータが存在する。それによると府営住宅はNT全戸数の26.9%、その他の公的賃貸住宅は24.4%となる。同書14頁を参照。
 - 6) 堺市南保健福祉総合センター生活援護課『平成17年度生活保護運営計画書』を参照した。
 - 7) 堺市『泉北ニュータウン再生指針』2010年5月、16頁
 - 8) 河合克義『大都市のひとり暮らし高齢者と社会的孤立』法律文化社、2009年
 - 9) Townsend, P (1957): The family life of old people; An inquiry in East London. Routledge & Kegan Paul. (山室周平訳『居宅老人の生活と親族網；戦後東ロンドンにおける実証的研究』垣内出版、1974年)
 - 10) 金子勇「都市高齢者のネットワーク構造」『社会学評論』第38号、1987年、336-350頁
 - 11) 前田信彦「高齢者の家族とソーシャルネットワーク」『季刊 家計経済研究』第7号、1998年、35-43頁
 - 12) 齊藤雅茂「高齢者の社会的孤立に関する類型分析——事例調査による予備的研究——」日本地域福祉学会『日本の地域福祉』第20巻、2006年、85頁
 - 13) 園田真理子の第2回「高齢者等が一人でも安心して暮らせるコミュニティづくり推進会議」での発言より。
 - 14) 齊藤雅茂「高齢者の社会的孤立に関する類型分析——事例調査による予備的研究——」日本地域福祉学会『日本の地域福祉』第20巻、2006年、84頁
 - 15) Krause, N. (1993) Neighborhood deterioration and social isolation in later life, *International Journal of Aging & Human Development*, 36(1), p.9-38
 - 16) 大谷信介『現代都市住民のパーソナルネットワーク——北米都市理論の日本的解説』ミネルヴァ書房、1995年
 - 17) 森岡清志『都市社会のパーソナルネットワーク』東京大学出版会、2000年
 - 18) 近藤克則『健康格差社会 何が心と健康を蝕むのか』医学書院、2005年、60頁
 - 19) 平井寛・近藤克則らが2007年10月までに死亡した男女2万8千人を対象に、死亡率を所得別に調べた。女性の死亡率は所得階層に有意な差は出なかった（『朝日新聞』夕刊、2008年11月8日付）
 - 20) 小川栄二、三浦ふたば、中島裕彦「利用者の援助拒否・社会的孤立・潜在化問題から福祉労働のあり方を考える」総合社会福祉研究所『総合社会福祉研究』第34号、2009年、28-40頁
 - 21) 河合克義『ホームヘルプの公的責任を考える』あけび書房、1998年
 - 22) Tunstall, J: Old and alone: A sociological study of old people. Routledge & Kegan Paul (1966). (光信隆夫訳『老いと孤独；老年者の社会学的研究』垣内出版、1978年)
 - 23) 「2009年社会保障・人口問題調査 第6回世帯動向調査」によれば、65歳以上の高齢者で息子と同居しているのは28.1%、娘と同居しているのは13.1%でいずれも前回調査より低下している。